【臨床・教育研究編】

I 調査研究・課題解決・問題点の紹介等

● 筆記行動支援システムの提案 I —中途視覚障害者の「書きたい」を支えるために—
理療教育・就労支援部理療教育課 伊藤 和之, 加藤 麦

研究所福祉機器開発部 伊藤 和幸 研究所障害福祉研究部 北村 弥生

キーワード：中途視覚障害 ノート・テイキング 筆記行動支援システム

抄録省略

本文掲載

● センター病院患者および自立支援局利用者等に対する東洋療法の活動報告

加藤 麦

キーワード：東洋療法、頸髄損傷、障害者リハビリテーション

抄録省略

本文掲載

● 頸髄損傷患者に対する東洋療法の効果-WHO「QOL26」、VAS を指標にして-

高橋 忠庸

キーワード：東洋療法 頸髄損傷 QOL26 VAS

抄録省略

本文掲載

II 教材・資料等の紹介

● 2012 ロンドンパラリンピック大会ゴールボール競技に出場して

江黒 直樹(女子日本代表ヘッドコーチ)

キーワード：ゴールボール ロンドンパラリンピック 障害者スポーツ

抄録省略

本文掲載

Ⅲ 専門誌、一般書等への掲載論文

● 視覚障害者用コミュニケーション関連用具

伊藤 和之

本稿では、コミュニケーションの4要素「読む(見る)・書く・聞く(聴く)・話す」の観点で中途視覚障害者の用具を概観した。

内容は、1. 視覚障害と中途視覚障害の概念、2. コミュニケーション関連用具の特徴と支援の要点、3. 学習での活用事例―”組み合わせ”がキーワード、4. まとめ・今後の展望の4節で構成した。2. は筆記具と補助具に大別し、解説した。筆記具は4種類、補助具は9種類に分類した。3. は、本稿の技術的な側面である。理療教育在籍者の学習手段の組合せ6事例を紹介した。

4. では、上記4要素のうち、「読む(見る)」と「聞く(聴く)」に関するニーズが用具開発に反映されている現状と、実際に用具の選択に当たる場合は用具同士の「組み合わせ」をイメージする必要性を説いた。一方、忘れられがちだが、これからの視覚障害リハビリテーションにおいては、「書く」ための支援が重要であることを、最新の機器開発に触れて提言した。

本稿は、「作業療法ジャーナル6月増刊号 テクニカルエイド. 三輪書店, Vol. 46 No. 7 2012」に掲載された。

キーワード：視覚障害者 コミュニケーション 支援機器 テクニカルエイド

本文掲載

Ⅳ 研究会等のテキスト・レジュメ

● 地域リハビリテーションとの連携―研究成果の普及に向けた取組みから―

伊藤 和之

本稿では、リハ・サービスの普及に関する基礎資料を得る目的で、「研究成果等普及啓発事業 厚生労働科学研究費・障害者対策総合研究事業(感覚器障害分野)研究成果発表会(一般向け)」に応募し、鹿児島市で開催した経緯を、主として地域リハビリテーションとの連携に視点を置いて報告した。

準備段階における現地のキーパーソンとの連携、広報活動が、視覚障害者と晴眼者双方の参加を促す情報づくりと、安全に配慮した運営を可能にした。

また、フォーラムの形式で、視覚障害エンドユーザー、福祉・工学・教育・行政の各関係者、鍼灸専門学校教職員の学生、一般市民など幅広い層の参加者を招くプログラムによって、63名の来場を得ることができた。

リハの分野においては、エンドユーザー(普及対象者)に影響を及ぼす自立訓練支援専門職や教育者(チェンジ・エージェント)との連携が、リハ・サービスの効果的な普及に欠かせない。今回の成功は、キーパーソンを中心とした現地スタッフの、連携への関心の高さが効を奏したと考えられる。

キーワード：視覚障害者 連携 地域リハビリテーション

本文掲載

【業務編】

I 教科教育に関する業務

● 平成 24 年度学ぶ力の向上業務報告

伊藤 和之

本業務は、理療教育在籍者個々の特性に合った学習手段と学習方法すなわち学習方略を見出すことを目的に、係間連携による学習相談や学習手段の開発など、多面的に継続している。

〈今年度の取組み〉

①学習相談窓口・図書利用支援：全学年を対象として学習相談に応じている。今年度は、7名の係が、総計35名、延べ56回の利用で65件の相談を受けた。科目の学習や国家試験に関する相談が増加傾向にある。

②DAISY勉強会(基礎編・応用編)：基礎編は5月に2回実施した。内容は、専用機の基本操作と試験時の操作方法とした。新入生のうち、18名が参加した。応用編は11月に1回実施した。内容は、録音からバックアップまでとした。全学年を対象とし、5名が参加した。

③筆記行動支援システムの実用化：a)厚生労働科学研究から、平成23年度障害者自立支援機器等開発促進事業を経て開発した点字タイプライター式文字入力システムが、商品名「BraiTalker」として発売されるに至った。b)施術録の電子化推進業務と連携して、予約管理・予診票作成・施術録作成システムの製品化を実現した。

本業務は重点事項から出発して10年が経過した。次年度から名称を改め、「学習支援係」とする。

キーワード：学習支援 DAISY 筆記行動 BraiTalker 施術録

本文掲載

● 平成 24 年度臨床実習施術録の電子化の推進業務報告

加藤 麦

臨床実習室の施術録の電子化については、平成21年度更生訓練所運営方針として取組みを開始し、基本計画を策定した。その後、平成22年度から通常業務となり、基本計画に沿って今年度も業務を進めた。

昨年度実施した基本計画は、環境整備と変更、施術録作成ソフトの新規開発(厚生労働科学研究との連携)、予約管理・予診票作成システムとの連動であった。

今年度は、電子カルテシステムの仕様策定と入札の手続きを行った。しかし、諸事情により開札して落札企業が決定してから納品までわずか3ヶ月という期間しか残されず、企業にとっても3つのソフトウェアからなるシステムを製品化するのは事実上厳しい作業となったが、規定どおり、年度内に納品いただいた。

今後の課題としては、様々な障害状況に対応したパソコン環境の整備、臨床室運営に適合したシステム開発、施術録の作成と管理に関する指導方針の検討が必要である。

来年度は、実際にハードウェアシステムを利用者に試用していただき、より良いシステム開発に繋げ

ていきたい。

キーワード：電子カルテ 臨床実習

本文掲載

● 平成 24 年度東洋療法推進の活動報告

加藤 麦

本活動は、医師から許可、依頼、または紹介のあった者を対象として、臨床研修を希望する教官が東洋療法（あん摩・マッサージ・指圧、はり、きゅう）の施術を実施することにより、教官の臨床技術向上を図るとともに、得られた情報を蓄積、活用していくことで、東洋療法を検証し東洋療法の推進に寄与しようとする活動である。

今年度の延べ施術人数は 280 名であり、実人数では 17 名であった。当センター病院の入院患者は 2 名（延べ施術人数 8 名）、外来通院患者 7 名（延べ施術人数 89 名）であった。外部の医療機関からの依頼・紹介患者は 2 名（延べ施術人数 46 名）であった。自立支援局利用者は 6 名（延べ施術人数 137 名）で、いずれも頸髄損傷による自立訓練利用者であった。

今後の課題として、VAS による評価の分析を進めることで、障害者特有の愁訴に対する東洋療法の可能性の追求すること、および施術担当者を増員することで施術対応時間に余裕を持たせ、患者のニーズになるべく応えることができる態勢作りが重要である。

今年度は東洋療法の実績作りという点では、一定の成果を上げることができた。また、センター病院からの紹介患者も増やすことができた。今後も脊髄損傷患者を中心とした症例集積と客観的評価を重点に置いた臨床データの蓄積を推進することで、障害者リハビリテーションにおける東洋療法の可能性を追求していきたい。

キーワード：東洋療法 頸髄損傷 障害者リハビリテーション

本文掲載

II 理療研修に関する業務

● 平成 24 年度卒後特別研修会実施報告

飯塚 尚人

本文省略

III 理療指導に関する業務

● 平成 24 年度点字図書室業務報告

小泉 貴

本業務は、理療教育の利用者に墨字、点字、デイジーの各図書やデイジー再生機を貸し出すことによ

り理療（あん摩・マッサージ・指圧、はり、きゅう）の知識の獲得、学習効果、国家試験合格に寄与することを目的している。

今年度の図書の貸出し数は、墨字図書 711、点字図書 19、テープ図書 0、デージー図書 1,023 であった。

また、墨字図書、点字図書について成書の購入によって蔵書としているが、カセットテープ図書、成書化されていない点訳書、デージー図書については、昨年度同様、図書館の障害者サービスにおける著作権法第 37 条第 3 項に基づく著作物の複製等に関するガイドラインにより、ボランティアグループがその製作に従事した。

さらに、ボランティアグループ「リハ朗読会」、「デージー所沢」、「おむすびころりん」を対象とした合同研修会を実施した。内容は、「音訳スキルアップ講座」と「難しい東洋医学の読みなどについて」の 2 つで構成した。

次年度は、各業務の質を高めるとともに、ボランティアグループの更なる発展への協力など、継続する課題に取り組みたい。

キーワード：点字図書室 朗読ボランティア デージー

本文掲載

IV 教務に関する業務

● 平成 24 年度ヒューマンアシスタント調整係業務報告

杉本 龍亮

理療教育課では、視覚障害を有する職員に対して、視覚的援助を行い、当該職員の職務能力を補填し、向上させる目的で、ヒューマンアシスタント（以下、「HA」とする）を配置している。

HA の業務は、墨字の専門書や資料の朗読、録音、利用者に提供する墨字、デージーの各種資料作成の補助、採点業務の補助など多様である。今年度も、3 名の HA を委嘱し、視覚障害を有する職員の要望に対応できるように調整した。実施期間は、平成 24 年 4 月から平成 25 年 3 月とした。

また、模擬試験問題の録音や期末試験の採点時は、別途時間枠を設けた。HA の利用者数は合計 11 名であり、教官が 9 名、講師が 2 名であった。使用文字別では、点字使用者が 9 名、墨字使用者が 2 名であった。墨字使用者とは、視覚障害の程度は HA を必要とするレベルだが、業務遂行上点字を使用していない職員を意味する。

障害者の自立において、合理的配慮が必要であることは社会的要求になりつつある。当課の取組みは、合理的配慮を HA というシステムによって、先駆的な実践例と言える。視覚障害を有する教官が訓練生に対するより良いサービスの提供や細やかな訓練を実施するために、HA の果たす役割は大きい。研修を実施するなど、質の維持、向上に努めたい。

キーワード：ヒューマンアシスタント 朗読 代筆 代読

本文掲載

理療教育課 研究・業績集(第 23 号)平成 24 年度版

平成 25 年 12 月 24 日 発行

編集者 国立障害者リハビリテーションセンター

自立支援局 理療教育・就労支援部 理療教育課 研究・業績集編集係

発行者 国立障害者リハビリテーションセンター

自立支援局 理療教育・就労支援部 理療教育課

〒359-8555 埼玉県所沢市並木 4-1

TEL 04-2995-3100